

# 真如縁起（随縁）説の思想史的背景

## ——中国仏教における『究竟一乘宝性論』の位置づけの再検討——

李 子 捷

中国仏教においては、法蔵（六四三―七二二）は真如の一側面が有為法のように働く真如随縁を説いている。一方、法蔵以前、曇延（五一六―五八八）や浄影寺慧遠（五二二―五九二）の著作にも真如の働きとその分類が見える。つまり、真如縁起（随縁）の思想的背景は法蔵以前から始まっていたと考えられる。<sup>(1)</sup> 本論において、インド仏教における如来蔵思想の代表とされる『究竟一乘宝性論』（以下『宝性論』）を中心とし、真如の働きという思想の背景を探し、その『宝性論』が中国仏教思想史に与えた影響を再検討してみたい。

### 一 『宝性論』に見られる「gotra, tathatā」と「真如仏性」

『宝性論』の漢訳者である勒那摩提（生没年不詳）は、菩提流支（？―五二七？）とともに中国に渡って北朝で唯識・如来蔵経論の翻訳に取り組んだインド論師であり、初期中国唯識・如来蔵思想における中心的な人物であった。その『宝性論』には、

gotre sati bhavati nāhetukam nāpratyayamiti... yadi hi tad gotram antareṇa syād ahetukam apratyayaṃ pāpasamucchedayogena tad icchanūkāṇāṃ apy aparivirvāṇagotrāṇāṃ syāt. (RG, 36)<sup>(2)</sup>  
有一切依因真如仏性、非離仏性無因縁故起如是心。偈言見苦果樂果、此依性而有故。若無因縁生如是心者、一闡提等無涅槃性、必發菩提心。偈言若無仏性者、不起如是心故、以性未離一切客塵煩惱諸垢。（勒那摩提訳『究竟一乘宝性論』、『大正』三一・八三一a）

という説明がある。梵本によれば、種姓 (gotra) があるため輪廻や涅槃が存在し、もし種姓がなければ、無涅槃の一闡提が存在する、という。しかし、漢訳になると、一切の依因である真如仏性があるため輪廻や涅槃が存在することとなっている。つまり、漢訳『宝性論』における真如は、仏性と結びついて「真如仏性」となり、世間の輪廻と深く関わり、その拠り所または原因となっているのである。漢訳『宝性論』になると、梵本に見られる種姓の有無ではなく、真如は有為と無為との両方の原因となっている。

漢訳『宝性論』において、「gotra（種姓）」は「真如仏性」と翻訳された場合が少なくない。その代表的な一例を見てみよう。

samāsatas trividhenārthena sadā sarvasattvās tathāgatagarbhā ity uktam  
bhagavatā. yad uta sarvasattveṣu tathāgatadharmakāyāpariṣpharaṇārthena  
tathāgatatahātāvyaibhedārthena tathāgatagoṭrasaṃbhavārthena ca. (RG,  
26)

有二種義、是故如來說一切時一切衆生有如來藏。何等為三、一者、如來法身遍在一切諸衆生身、偈言仏法身遍滿故。二者、如來真如無差別、偈言真如無差別故。三者、一切衆生皆悉實有真如仏性、偈言皆實有仏性故。（勒那摩提訳『究竟一乘宝性論』、『大正』三一・八二八b）

即ち、梵本では「如來の種姓 (tathāgatagoṭra)」が説かれているが、漢訳になると、「真如仏性」または「仏性」になっており、「gotra（種姓）」という表現が全く見えなくなっている。更に注意すべきは、梵本は「法身・真如・種姓」という三つの重要な概念を利用して如來藏を解釈しているが、漢訳になると、「法身・真如・真如仏性」という組概念となっていることである。<sup>(3)</sup>

では、漢訳『宝性論』に見られる真如仏性は、どのような存在であろうか。『宝性論』の以下の関連部分を見てみよう。

tatra samalā tathatā yo dhātur avinirmukta-kleśa-kośas tathāgata-garbhā ity

真如縁起（隨縁）説の思想史的背景（李）

ucyate. nirmalā tathatā sa eva buddhabhūmāv āśrayaparivṛitlakṣaṇo yas  
tathāgatadharmakāya ity ucyate. . . tatra samalā tathatā yugapadekakalam  
viśuddhā ca saṅklīṣṭā ceti. (RG, 21)

真如有雜垢者、謂真如仏性未離諸煩惱所纏、如來藏故。及遠離諸垢者、即彼如來藏轉身到仏地得証法身、名如來法身故。…中略…真如有雜垢者、同一時中有淨有染。（勒那摩提訳『究竟一乘宝性論』、『大正』三一・八二七a）

無垢の真如そのものは清浄であるが、雜垢や煩惱のある状態は、梵本によれば「samalā tathatā（有垢真如）」となり、漢訳本によれば「真如仏性」となっている。つまり、この有垢の真如仏性は、世間の雜垢から離れず、清浄であると同時に、有為法としての諸煩惱とも深く関わっているものである。

## 二 真諦・慧遠・吉蔵と『宝性論』

『仏性論』は『宝性論』の焼き直しではないかという推測が、長尾雅人氏によって提唱されており、服部正明氏はこれを継承し、『仏性論』が『宝性論』の異訳的関係にあることを指摘した。<sup>(4)</sup> 中村瑞隆氏の研究によれば、説明部分を除き去ると、両論の一致は明らかである。<sup>(5)</sup> そして、高崎直道氏の研究によれば、同じ真諦訳とされる『撰大乘論釈』の如來藏説は、梵本『宝性論』を利用しており、『宝性論』の内容は『撰大乘論釈』・『仏性論』などに分散配置されているが、『宝性論』の

真如縁起（随縁）説の思想史的背景（李）

名は示されていない。<sup>(6)</sup>これより見ると、真諦訳とされる経論における『宝性論』の役割を無視できない。<sup>(7)</sup>

北朝仏教の代表者として、淨影寺慧遠は『宝性論』を依用し、仏性について、

故説衆生悉有仏性、定必当成。令捨放逸、随順趣向。『宝性論』中、所為有五。…中略…五為誹謗真如仏性、謂是則斷滅、故説仏性は真是実常樂我常。亦可為於怖畏斷滅樂実衆生、故説仏性。仏性之義、略弁如是。（慧遠撰『大乘義章』、『大正』四四・四七七c）

と述べている。つまり、一切衆生が持つ仏性を解釈するため、慧遠は『宝性論』に見られる「真如仏性」を利用しており、仏性が真如のようにすべての衆生にとって真実であり、常に存在することを説いている。

次に南朝仏教の代表者である吉蔵の場合を見てみよう。吉蔵の著作では『宝性論』の引用はあまり見られないが、『仏性論』の引用は比較的多く見られる。<sup>(8)</sup>これは漢訳『宝性論』が主に北地で流行った証拠になるかもしれないが、重要なのは、吉蔵は仏性を解釈する際、最も重視する経論の一つは『宝性論』の焼き直しとしての『仏性論』である、という事実である。これについて、以下のように述べられている。

依『仏性論』、蔵有三種。一所撰蔵、二隱覆蔵、三能撰蔵。…中略…三蔵云、亦言如来胎。如来蔵在煩惱之中、名如来蔵。如来蔵即是仏性。仏性有三、一自性住仏性、二引出仏性、三至得仏性。引出

仏性、從初發意至金剛心、此中仏性名為引出。…中略…諸仏三身即是至得仏性、以前二為本。此語出『仏性論』。（吉蔵撰『勝鬘寶窟』、『大正』三七・六七b）

即ち、吉蔵は『仏性論』に見られる三種仏性説を用いて仏性・如来蔵の根本を解釈している。この三種仏性の中、自性住仏性と引出仏性が重点である。ここで注意すべきは、中国仏教においては、インド仏教において主流でない仏性思想を通して種姓説を弱めるために、漢訳『宝性論』などが大きな役割を果たしており、<sup>(9)</sup>『宝性論』の焼き直しである『仏性論』はこの傾向を継承し、漢訳『宝性論』に遡れる仏性説を用いて種姓説・仏身説を統合しようとする、ということである。<sup>(10)</sup>吉蔵の仏性思想にとって、『宝性論』に基づいた『仏性論』の影響は決定的であろう。<sup>(11)</sup>

### おわりに

『宝性論』は、その漢文の注釈書が現存していないため、インド仏教と違い、東アジア仏教にとってあまり重要ではないと思われるがちである。しかし、南北朝以降の中国仏教においては、『宝性論』の思想と用語を依用しており、『宝性論』を参照しつつ翻訳された経論、あるいは『宝性論』に基づいて作られた経論は、意外に多い。これは中国仏教の如来蔵思想に関わる重要な問題であり、それに対する厳密な考察は、今後の課題にしたい。

- 1 類似の意見として、山田亮賢「真如随縁の思想について」(『印度学仏教学研究』第二巻第一号、一九五三)を参照されたい。
- 2 *The Ramagotravibhāga Mahāyānottaratantrasāstra*, ed. E[dward] H[arnilton] Johnston (Patna: The Bihar Research Society, 1950).『宝性論』の梵本の引用はこれによる。以下省略。
- 3 『tathāgatadharmakāya (如来の法身)』・『tathāgatatahata (如来の真如)』・『tathāgatagotra (如来の種姓)』という組概念は、インド仏教における如来蔵思想の代表的な経論とされる『宝性論』に見られる如来蔵の定義と言えらる。しかし、漢訳になると、「法身・真如・真如仏性」となっている。
- 4 服部正明「仏性論の一考察」(『仏教史学』第四巻第三・四号、一九五五)。
- 5 中村瑞隆「梵漢対照 究竟一乘宝性論研究」(山喜房仏書林、一九七一、五七頁)。
- 6 高崎直道「高崎直道著作集第七巻 如来蔵思想・仏性論Ⅱ」(春秋社、二〇一〇、一七三頁)。
- 7 筆者の研究によれば、『仏性論』における仏性説・真如説が『宝性論』から受けた影響は、決定的であろう。拙稿「真諦訳とされる『仏性論』における「仏性」について——『地持経』・『宝性論』・『撰論釈』との関連を中心に——」(『駒澤大学佛教学部論集』第四六号、二〇一五掲載予定)参照。
- 8 奥野光賢「吉蔵撰『勝鬘宝窟』をめぐって」(『奥田聖應先生頌寿記念インド学仏教学論集』佼成出版社、二〇一四)。
- 9 拙稿「究竟一乘宝性論」の「gotra (種姓)」について——なぜ勒那摩提は漢訳本でこの語を翻訳しなかったか——」(『駒沢大学大学院仏教学研究会年報』第四八号、二〇一五)。

真如縁起 (随縁) 説の思想史的背景 (李)

- 10 前掲注7の拙稿。
  - 11 筆者の知る限り、「真如仏性」の語は漢訳『宝性論』・『法華論』・『金剛仙論』に初めて出ており、それ以外、唐代以前、淨影寺慧遠(五二二—五九二)・天台智顛(五三八—五九七)・嘉祥吉蔵(五四九—六二三)にしか使用されていない。
- 〈参考文献〉
- 高崎直道『高崎直道著作集第七巻 如来蔵思想・仏性論Ⅱ』(春秋社、二〇一〇)
- 中村瑞隆「梵漢対照 究竟一乘宝性論研究」(山喜房仏書林、一九七二)
- 服部正明「仏性論の一考察」(『仏教史学』第四巻第三・四号、一九五五、一六一—三〇頁)
- 奥野光賢「吉蔵撰『勝鬘宝窟』をめぐって」(『奥田聖應先生頌寿記念インド学仏教学論集』佼成出版社、二〇一四、八五二—八五九頁)
- 山田亮賢「真如随縁の思想について」(『印度学仏教学研究』第二巻第一号、一九五三、二七九—二八一頁)
- 李子捷「『究竟一乘宝性論』の「gotra (種姓)」について——なぜ勒那摩提は漢訳本でこの語を翻訳しなかったか——」(『駒沢大学大学院仏教学研究会年報』第四八号、二〇一五、二八〇—二八八頁)
- (本稿は平成二十七年年度日本学術振興会科学研究補助金〈特別研究員奨励費〉の助成を受けたものであり、その研究成果の一部である。)
- 〈キーワード〉 『宝性論』、真如、真如仏性、如来蔵、真諦、慧遠、吉蔵
- (駒澤大学大学院・日本学術振興会特別研究員D)